

世界の光

世界の光
第83号
平成18年
1月号
主幹
笈 尚子

明治 天皇 御製

五十鈴川 清き流れの末くみて

心を洗え 秋津島人

さしのぼる 朝日の如くさわやかに

もたまほしきは 心なりけり

あさみどり すみわたりたる大空の

ひろきをおのが 心ともがな

平成十八年の新春を迎へ 謹んで

御皇室の 弥栄を祈念し奉り

世界の平和と 人類の幸福を

希求いたします

巻頭の辞

笈尚子

明治天皇陛下 昭憲皇太后陛下の御在世は我が国が三百年に亘る徳川幕府の鎖国から維新政府となる時でした。

明治政府は富国強兵政策により米英世界列強の中に加はり、百年後の今日、大正・昭和・平成の御世となつて振りかへれば、六十年餘の昭和の時代は厳しい戦争があり、昭和天皇陛下の大詔の下に終戦、米国の占領時代を経て、今日を迎へました。

私は、米国による原子爆弾が広島・長崎に投下されましたが、その惨状の凄さは人類に最後の自覚を神々が求められたと思ひます。

昭和天皇は、日本人が全滅しては皇祖皇靈に申し訳ないので、軍の反対を押し切られ、御一存を以つて終戦を詔し賜ひ、そして国民は生命を守ることが出来ました。

昭和天皇様は一命をマッカーサー元帥に託し、全責任は自らにあり、どうか国民を助けられたいと申されたので、マッカーサー元帥は感動されたのです。

アメリカ人は、マッカーサー元帥を尊敬して、士官学校前にマッカーサー元帥の銅像を建立して居ます。

人類は核の出現により、存亡の岐路に立たされてしまったと思ひます。

若し又、之が戦争に使用されれば、地球が異変を起こし、人類は今日以上の試練を受け、破滅に至るのであります。

『蘇生古事記』と私

菟尚子

『古事記』とのつながりは、父の在世中、十三歳の頃から毎月発行の『昭和の光』以来でした。

当時、日本の国民は外来思想こそ、もつとも進歩的であり、体得すべきものと言ふ風潮でありました。

昭和十年頃、わが国は大変不景気でした。

軍隊の中で問題が起こったのもこの頃で、世の中が不安定な気運の中に在りました。

父は黙々と『古事記』に関する研究を掲載し、私は毎月発行を手伝ひました。

外国のものは、特に英語は敵国語であると排斥される様になりました。

名古屋からも満州行きの軍人が多く有りました。

軍人が大きな動きの中に戦争に向かって居りました。

今日から思へば、全世界的にこのやうな動きになって、「日・独・伊」三国同盟から日米開戦と進展。

昭和十九年には、資源の欠乏にて紙が入手出来ず、『昭和の光』より『照明』と改題した、父の四十餘年間に亘る機関誌の発行は不能となりました。

その後、父は黙々として『蘇生古事記』の原稿に取り掛かり、筆を進めました。

大東亜戦争に突入し、戦火は中国大陸より各方面に拡大。

昭和天皇は「朕の志にあらず」と大御心の下に、陸軍の圧力に押し切られ、開戦の『御詔』が発せられました。

開戦当初は、日本も戦力が有りましたが、物量に於いては到

底大刀打ち出来ず、昭和十九年には本土空襲が度々となり、東京・大阪・名古屋、その他の都市の殆どは焦土となり、昭和二十年八月六日には広島、原子爆弾投下、次いで八月九日には長崎に原子爆弾が投下され、ここに於いて

昭和天皇の玉音放送が八月十五日に放送され、終戦となりました。

当時は国民が 天皇陛下の御肉声を聞くことは出来なかつた時代だけに、その感慨は一入でした。

昭和天皇は、広島・長崎の原爆投下により多数の国民が犠牲になったことを憂ひ賜ひて、御前会議により八月十五日、終戦の御詔を發せられ、大東亜戦争は終わりました。

現在の中国は毛沢東の率ゐる共産党の国家であり、当時の日本軍が戦つた軍隊は台湾へ向かつた中華民国・蒋介石軍でありました。

南方軍は殆ど無疵であつた為、宮様方が 天皇陛下の詔書を持って、各方面へ飛ばれて無事に終戦を迎へられました。

中国の蒋介石主席は、占領軍の会議に於て日本の為に友好的な提案をされました。

同氏は、日本の兵学校を卒業して居られ、日本の国民性等を理解された方であり、印度の代表も日本の為に友好的でありました。

又 天皇陛下を戦犯とする意見も出た由ですが、蒋介石氏は「その様なことをすれば、日本人は最後の一人まで戦ふことになる」と言はれたのでありません。

我が家は、名古屋の空襲によって焼失しましたので、県下、祖父江町に縁故の家があり、殆ど家財もすべて焼失し無一物にて其処に避難しました。

父は、大切な書物を知立神社の神山宮司にお願いして預かつ

て戴いて居りましたので、焼失を逃れました。

父が四十五年に亘って発行しました月刊誌である『照明』の残部は名古屋の家が焼失の為残って居りません。

父が逝かれ、昭和三十六年頃、弟より父の遺稿『蘇生古事記』が私方に届きましたので、その出版を決意し、主人・昌憲にも応援して戴きました。

毎夜、家事を終え、ガリ版を切り、随分長い時間がかかりましたが、十年餘にて『蘇生古事記』序・上巻・中巻・下巻を發行致しました。

『古事記』の言霊(ことたま)による解説であります。

大宇宙の創成より、神生み、国生み、壮大なわが国の歴史であります。

『古事記』は大宇宙創成より始まる神祕の書であります。

明治天皇御製

いそのかみ ふることふみは よろづよも

さかゆくくにの たからなりけり

かみつよの ことをつばらに しるしたる

ふみをしるべに よをおさめてむ

いすずかは きよきながれの すえくみて

こころをあらへ あきつしまひと

教育について

寛尚子

教育は人間として最も大切なことであります。

前号にも書きましたが、人として、世の為・人の為つくす事が出来る様に、親たる者は将来を考へて、幼時より教へ学ぶことを実行すべきであります。

先づ第一に、子供の品性を尊び、親として範を垂れることであります。

此の点について、以前本誌にも掲げましたが、明治天皇の御勅語である『教育勅語』は、敗戦と共に之を範とする事なく、我が国の教育者は国民教育の指針を忘れ、光輝ある歴史も、先人の偉徳も伝へぬ教育方針の為に、今日の混乱を来したのであります。

随想

寛尚子

最近大変悲惨な事件が多く発生して居ります。

特に幼い生命が失はれて居ます。

此の様な事件を起こすのは、異常な精神状態の者が突然起すもので、精神の弱者とも思はれます。

その犯人に外国人も見られる様になりました。

出稼ぎの外国人は、日本が余程良い国である様に思つて来たのでしよう。

然し、現実には厳しく、その一部は悪い日本人に加担し、強盗や殺人を繰り返し、麻薬やピストルを販売して居ります。又、青少年の就職についても、現実は大変厳しく、いろいろ問題が起きて来て居ります。

大学を卒業しても就職口が無く苦勞して居る青年が多いこの頃です。

外国では、現実の日本の実態を知らず、遠い国々から遙々やって来る人達を受け入れる余裕は無いのでは？と思ひます。然し、私は日本人が最も大切にすることは、日本の本質であり、

皇室、即ち

天皇陛下のご存在であります。

徳川幕府の鎖国政策によって、世界の進歩より立ち遅れた国家を思ひ、明治維新を来たらしめた志士達の犠牲を思ひます。

国を思ひ、身を捨て、維新に殉じた志士達を思ひます。

大石凝真素美先生は、当時の幕府が京都に於て、志士の大弾圧を行った日の前夜、天満宮が夢に現れたまひ、「早く去れ」とのお知らせによって、大弾圧から逃れられたのであります。

以前の本誌に記しましたが、国を憂ひ、政府への投書を葉書にて投函され、これに注意された際、「自分は金が無く、葉書を買うのだけより出来なかつた」と申されました。

己が身は 武蔵の野辺に消ゆるとも

止めおかまし 大和魂

吉田松陰先生の辞世の一句であります。

考へる此の頃

克尚子

我々が巷の中で思ひ、何とかならぬかと考へて居ても、なんともならぬことが多くあります。

私は、日本国の至宝『古事記』を言霊によって解釈をした『蘇生古事記』を十一年の歳月を要してガリ印刷にて出版しましたが、この日本の至宝・上代の歴史書の中に、日本国民の原点であり、総論でもある真実が秘められて居る事を知ることが出来ます。

『古事記』について、本居宣長翁は読み易くされた為に、之を読み、いろいろ解釈されましたが、その人の『古事記』に対する態度によって、その解釈が全く不明となる場合が見られますので、『古事記』解釈の態度について私見を述べてみたいと思ひます。

第一に、『古事記』は神聖なる我が日本国の至宝であり、古代の歴史書である事。

第二に、日本国中の神社が、日本国民の信仰により守護されて居る事實。

ですから、誰が何と言つても、日本国民は神々の守護し賜ふ日本国に生まれ、

天皇陛下を上にか戴き、世界平和を祈念し、利益のみを追求せず、世界人類の幸福の為に常に努力すべきであります。

そして、之は何としても成功させねばならぬ、将来の人類世界の為の大切なことであると思ひます。

歴史上から見た日韓関係

菟尚子

現在の世界情勢は、いろいろ緊急事態が生じて大変困難な問題が起きて居ります。

又、宗教問題についても、過去、歴史的に色々有りましたが、指導者の自覚を促して、世界の平和を希求することこそ、宗教家の使命であることを思ひます。

現在は、残念ながら核が世界戦争を中止する何よりの手段となつて居ます。

隣国。北朝鮮が日本攻撃の核を準備完了と言つて居ります。

又、中国も北朝鮮と共に日本と戦争すると宣言して、潜水艦他、各種軍艦を建造中であり、国民の幸福を第一にして幸福な国家を建設すると言ふ目標を掲げて居た中国の変化は大変危険な動きであります。

中国と北朝鮮とは、昔から歴史的に見て不穏な動きをする国でありました。

明治維新の際に、西郷隆盛(大西郷)は、此の事を既に見抜いて居られました。

昭和天皇は、日韓の関係を兄弟の国であるとの大御心から日韓併合、即ち、皇后陛下の妹君を韓国の皇太子の妃殿下にと御婚姻を進められました。

又、大分古い時代の事ですが、『古事記』に、新羅の国の皇子が赤い玉を発見され、その玉の行方を追つて日本の浪速に到り、美味しい食物を得られ、そのまま日本に留まられ、日本の豪族の女性と結婚され、その一族の中から 神功皇后(息長帯比賣命)、即ち 仲哀天皇の妃殿下が出られました。

又、神功皇后は大変美しい女性で、且つご長命で在られました。

御子の 応神天皇もご長命で在られました。

同時代は、今日の北朝鮮は高麗国と言つて、古代中国の影響を受けて居りましたが、共に古い時代からの隣国として深い交流を重ねて来た国であります。

先の 昭和天皇が、日本は戦争をしてはならないと詔し給ひ、以来戦争をせず、今日に到りました。

核兵器が出現して居る現在、何れの国も戦争を止めねば地球は爆発して、人類は滅びてしまふのです。

広島・長崎に原爆を投下した米国はその悲惨さを見て、自らの大きな罪を自覚しなければならぬと共に、日本は世界平和を実現する使命を帯びて、立派に立たねばならないと思ひます。

故 横井時常 近江神宮宮司を偲びて

菟尚子

終戦となり、進駐軍が日本へ来て、神社が各地に多くあるのに就いて、進駐軍より靖国神社に質問があり、當時、靖国神社権宮司で在られた横井時常先生は、進駐軍の係の米軍将校との交渉をされたのです。

十年以上前のことですが、言霊祭典を近江神宮にて執行して戴いた際、先生は亡き父と一緒に神道関係の行事に参加致しました私を覚えておいでになって、大変親しくして戴き、御自ら近江神宮の中をご案内して下さいました。

横井先生は、宮司をご引退の際に、「朝の禊が出来なくなりま



在りし日の先生のお姿(昭和61年4月)

したから」と申されて、奥様と東京へご一緒に、ご子息方へお帰りになり、東京にてご逝去になられました。

先日、NHKの靖国神社特集の番組を見て居ましたら、進駐軍と折衝する日本側の方々の中に、横井先生のお姿を拝見し、大変嬉しく且つ懐かしく想ひ出されました。

と同時に、先生のご功績に対し感謝致しますと共に、改めてご冥福をお祈り申し上げます。

父 水野満年の遺志を継承して

荒尚子

今、主人・昌憲の三回忌を終へ、過ぎし日のことを思いつくままに記しておきたく筆をとります。

『蘇生古事記』の原稿小包が、父と一緒に生活して居た弟・明(あきら)方より私方(当時は名古屋市東区徳川町)へ送られて参りました。

そして、電話にて弟は「送った原稿は僕よりも姉さんに頼んだ方が、お父さんが喜ばれると思う」とのことでした。

昭和二十九年一月六日に急逝された父の生涯の研究成果である『蘇生古事記』は、同志であり、親友であった小笠原長生閣下、一条公爵閣下、又時の総理大臣・平沼騏一郎閣下、修養団主幹・蓮沼門三先生、熱田神宮宮司・長谷外余夫先生、その他東大教授、京大教授などの諸先生が同志として名を連ねられた「古事記正解研究会」による日本の至宝である『古事記』の研究は、日本民族にとって最も大切なことであると思ひます。

当時、父は同志の諸先生と研究を始め、毎月一回、一条公爵邸に於ける研究会に出席の為上京致して居りましたが、昭和十九年、空襲にて一条公爵邸が消失し、又危険とのことで、『上表文』の研究が終り、中止となりました。

従って『蘇生古事記』は「古事記正解研究会」として『上表文』のみの研究を終へ、日本の敗戦を以て、研究会も一時中止となりました。

父は深く大石凝真素美先生を信頼し、その学風を継承して『大石凝真素美全集』を出版し、言霊学の普及・発展に努力致して居りました。



大石凝眞素美翁の奥津城 (昭和61年撮影) 改修前

又、三重県亀山市木下に大石凝眞素美の奥津城を同志の方々と図って建立致しました。

この奥津城は、大石凝眞素美翁が晩年を過ごされた母方の生家である川村家の奥津城に隣接して立てられて居ます。

昨年十月二日に執り行われました墓前祭の折、この奥津城の件にて隣地の墓地のお寺よりお尋ねがありましたので、私が父より聞いて居ることを書き記します。

筆者は若い時でしたから詳しくは分かりませんでした。墓地購入に際して、父が直接十五坪の土地を寺から購入し、いろいろと骨折って実現致したと聞いて居ります。

父の没後は、主人・昌憲や家族と共に毎年お参りを続けてまいりました。

十数年前には、武田洋一氏、島本邦彦氏が来られ、祭典の後、お寺にて色々お話をされました。

その後は、山本白鳥女史が来られてお祭りをされましたが、その後何れも来られなくなりました。

昭和六十一年から、毎年一回、名古屋の石田博昭氏が門人の方々と清掃・祭典を奉仕して戴いて居ます。

昨年の例年祭は十月二日に行はれましたが、祭典後、川村政敬氏宅にご挨拶に伺いまして、暖かいおもてなしを賜り、大変嬉しく思いました。

又、当年九十六歳になられる久仁子刀自も玄関先までお出ましを戴き、父・満年に連れられて小学生の頃に川村家に泊めて戴いた折のお話などを伺い、大変懐かしく楽しい一時を過ごさせて戴きました。

奥津城の前にて(筆者)



川村家の前にて (久仁子刀自を囲んで)



後記

○ 平成十八年の年頭に当たり『世界の光』誌八十三号をお届けさせて頂きたく思います。

○ 算主幹も、ご主人・昌憲氏のご逝去から三回忌を向かへられて、少しづつお元氣を取り戻されつつあります。

○ 前号はちようど一年前の発行でしたが、インターネット上 (<http://misoci.org>) に本誌を掲載致しました為、色々な方々からのお便りを頂戴いたしました。

○ 中でも、小笠原長生氏のご子孫に当たられる方より、大変懐かしいとご連絡を賜り、「祖父がいつも水野満年氏の名を呼んで居ましたが、どんな方か初めて知りました」とのお言葉を戴き、早速、算主幹と電話され、親しくお話をされたことなどの嬉しい出来事もありました。

○ 本年一月五日(木)、名古屋市瑞穂区の神宮墓地に水野満年翁の奥津城を参拝。(上段の写真)

○ 翌六日、午後九時から五十二年祭を執り行いました。

○ 大石凝真素美翁顕彰会の恒例行事として四年前より行っており居りますが、光和養神道場にて同人六名参加のもと祭典を行ひました。

○ 昨年来の天候異変は地球規模の大異変の予兆と感じられずには居られません。

○ 殊に、この冬の大雪被害は異常であり、その犠牲者の方々に心よりお見舞い申し上げます。

○ 然し又、この天変地異の意味するものは何かを、とくと考え直すことも肝要かと思えます。人類が私利私欲に惑ひ、天地自然に順応することを忘れた時、大自然は大きな警告を発するのではないでしょうか。

(編集生)